

人文会ニュース

2005. 12

巻頭エッセー 不適切な言葉	瀬野精一郎	1
書店現場から 「誰」 に語りかけるのか?	西尾 実	3
十五分で読む「身体論」	鈴木晶子	5
名古屋八書店合同フェア・レポート	前田文雄	15
広島書店合同企画「教養としての哲学」を終えて ...	木村 斉	17
全国図書館大会茨城大会に参加して	持谷寿人	23
2005 年特約店グループ訪問報告		

青の歴史

M・バストゥロー 松村恵理・松村剛訳
古代、青は野蠻の色だった。現代最も好まれる色として勝利を収めるまでの「逆転の歴史」を、フランスの紋章学の鬼才が描く。4515円

ゴダール革命

蓮實重彦

作品の衝撃を受けとめ、増幅させ、変奏するように映画批評を展開してきた著者の、きわめつきのゴダール論。●リュミエール叢書・2415円

黒澤明と早坂文雄

西村雄一郎

——風のように侍は

「七人の侍」「羅生門」等の音楽で日本映画界に屹立する早坂文雄と盟友・黒澤明との出会いから別れまで。二つの巨星の生涯。4095円

サービスセンター **筑摩書房** 048-651-0053
*税込 <http://www.chikumashobo.co.jp/>

創元社

陳舜臣氏推薦

最新刊

5 魏晉南北朝 融合する文明
4 秦漢 雄偉なる文明
稲畑耕一郎監修 劉焯編 各巻平均3360円

以降、隔月刊行 | ①先秦 ②殷周 ③春秋
戦国 ④隋唐 ⑤宋 ⑥遼金元 ⑦明 ⑧清

図説 **中国文明史** 全10巻

オールカラーの巻ごと歴史博物館刊行開始!

〈本社〉大阪府中央区淡路町4-3-6 〈税込価〉
Tel.06-6231-9010 Fax.06-6233-3111
〈支店〉東京都新宿区神楽坂4-3 Tel.03-3269-1051
<http://www.sogensha.co.jp/>

日本美術の歴史

辻 惟雄 『奇想の系譜』から三十五年。日本美術の独創的なものもろろ、新しさを論じた著者がいま、縄文からマンガ・アニメまで三二〇枚の図版とともに日本美術の流れと特質を大胆に俯瞰する。 A5判・四七二頁／二九四〇円

エピソード記述入門

実践と質的研究のために

鯨岡 峻 フィールドでの人との関わりと、エピソード記述の練成とを、絶え間ない相互の往還の過程としてとらえ、いきいきとした生の場面を公共的な表現へとひろく方法を論じる。実践と不可分の真に質的な研究へと入門者を誘うテキスト
A5判・二〇四頁／二九四〇円

東京大学出版会

文京区本郷7-3-1東大構内 ☎03-3811-8814

たちまち重版!



写真提供:AFLO

女教皇ヨハンナ

世界で三〇〇万部の歴史エンタテインメント! 映画化決定! (『フリキの太鼓』のシュレンドルフ監督)

ドナ・W・クロス

阪田由美子訳 定価各1995円

時は九世紀、史上初の女性教皇が誕生した。だがその名は歴史から抹消された。伝説の女性を描く大河ロマン。

上下

草思社

東京都渋谷区千駄ヶ谷2-33-8
☎03(3470)6565 定価は税込

不適切な言葉

瀬野 精一郎

近頃テレビのアナウンサーが「只今の放送の中で、不適切な言葉がありましたことを、お詫び致します。」と放送することしばしば遭遇する。これは放送中に不適切な言葉が使われることに神経を尖らせている視聴者が、不適切な言葉が使われたと思うと、早速放送局にそれを指摘する抗議の電話を入れるためと思われる。

私などきわめて鈍感なためか、不適切な言葉が使われたことに気付かないことが多い。ところがアナウンサーは「不適切な言葉がありました」と発言するのみで、決してどのような不適切な言葉が使われたのか、具体的にその言葉を示すことはない。それは具体的に不適切な言葉を繰り返し放送回を避けるという意図によるものと思われるが、これでは鈍感な私などには、どのような言葉が不適切な言葉であったのか、さっぱりわからないことが多い。

しかし私でも、これまでは自由に使われていた言葉でも、近頃は差別用語、或いは不適切な言葉として使用することを控えるようになっていくことは知っている。そのような用語や言葉をあえて使用しようとは思っていないので、使用することは控えているつもりである。ところが最近では差別用語や不適切な言葉が、私の知っている知識を越えて、増加の一途をたどっているようである。そこでアナウンサーが「不適切な言葉がありました」と放送するだけでは、私の差別用語や不適切な用語についての知識は、一向に向上しないことになる。私の不適切な言葉についてのとぼしい知識でも、「小使」「百姓」「めくら」「ボケ」「女中」「看護婦」「馬鹿」「片手落ち」などが不適切な言葉に入っていることは知っているが、さらに「女」もその中に入っているようで、「女性」と表現すべきであるとの主張がされているようである。なぜ「女」は駄目で、「女性」なら良いのか私にはよくわからない。多分「女」には、男に従属した過去の暗いイメージがあるのに対し、「女性」には自立した近代的なイメージが表現されているということなのであろう。

そしてどうしても不適切な用語を使用しなければならぬ場合は、「女」を「女性」と変えるように、新しい用語を

創出して使用することになる。たとえば「小使」は「用務員」、「百姓」は「農民」、「めくら」は「視覚障害者」、「ボケ」は「認知症」、「女中」は「家政婦」、「看護婦」は「看護師」といった具合である。さらにオリンピックの種目では、体操競技と称しても問題とならないのに、学校現場では体操教師と呼ぶことは許されず、体育教師と呼ばれているとのことである。これは過去に体操教師という呼び方に、差別的イメージが存在していたことによる変更と思われる。しかし表現法を変えても、その実態は変わらないわけであるから、変更された表現法を使い続けていけば、やがて「農民」「用務員」「視覚障害者」「認知症」「家政婦」「体育教師」も不適切な用語になるであろう。

これらの用語は、とりあえず表現法を変えることによって使用されている例であるが、「馬鹿」「片手落ち」に代わる適切な用語を私は思い付かない。したがってテレビの放送中の不適切な言葉の多くは、「馬鹿」「片手落ち」ではないかと思っている。「馬鹿」はいわゆる頭が悪い、知能が劣っているという意味だけではなく、「馬鹿正直」「馬鹿げた事」「馬鹿騒ぎ」「馬鹿力」「馬鹿丁寧」「馬鹿馬鹿しい」「馬鹿話」「馬鹿を見る」等々多様な使い方がされる。これらが意味する内容を、「馬鹿」という用語を用いずに、簡潔に表現できる自信は私にはない。

「不適切な言葉」を全く使用しないとすれば、大学紛争華やかなりし頃、学生諸君が大学の教授を罵倒して、盛んに発した「専門馬鹿」という言い得て妙なる言葉や、

寝るより楽はなかりけり 浮世の馬鹿は起きて働く

番町で目あきめくらに道を問ひ

という狂歌や川柳も伝承することができなくなる。

また「片手落ち」という用語は、本来身体障害者のことを意味するものではなく、これを「不適切な言葉」に入れることに私は反対である。「片手落ち」の意味する別の表現法を御存知の方があれば、是非お教えいただきたい。

さらに日本語では不適切とされる言葉を、外国語を使えば許されるという傾向があり、「女」はウーマン、「女中」はメイド、又はハウスキーパー、「看護婦」はナースなどと使用しても全く問題とならない。これらの外国語は、日本語の過去のイメージから切り離された言葉として存在しているからであらう。

「誰」に語りかけるのか？

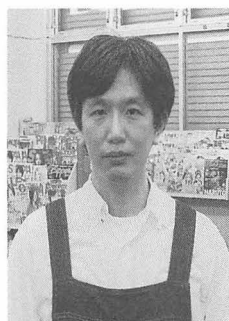
西尾 実

「なぜ人の話を理解しないのだろうか？」。このところ思い悩んでいたのが仲正昌樹氏の『なぜ「話」は通じないのか』（晶文社）には、まさに救いを求める気持ちだった。齢も同じ仲正氏はどう考えているのか。話は学会や論文等のアカデミズムにおける場面が中心であり身近な感じはないが、もしこの病いの処方としてならば強すぎて劇薬に近い。

小さな書店でみる場面はこうだ。六〇代前後の、特に男性に多いのは「これほど情報技術が発達しているのだから、すべて瞬時に解決できるはずだ」という頑固な主張である。そして一方、二〇代前後の世代は「特に現物^{リアル}を確認する必要はない。面倒なことはオンラインで済む」と不遜な面持ちである。怒りの表情と侮りの冷笑。押し問答と没交渉。説教臭さと幼児っぽさ。共通するのは一方的であること。そして「話を聴かない」。

この数年毎年、「コミュニケーション」論もどきを企画のひとつとして展開している。テーマを「人と人とのあいだの理解の在り方と変化。そして導きだされるであろうこと」と説明しておく。斉藤環氏の『文脈病』（青土社）をテキストに、理解の自明性の崩壊を臨床と思想の両面で。上野千鶴子氏の『家族を容れるハコ 家族を超えるハコ』（平凡社）からヒント得て、建築（物）とそこに住まう人々家族の在り様を。ガンダム世代の「ニュータイプ論」から転じて、科学技術時代における知覚と認識の変容について。そしてこの春は「接続せよ」教養・メディア・電車男」くただし苦痛に」と題して展開した。タイミンク良く北田暁大氏の『嗤う日本の「ナシヨナリズム」』（NHK出版）が出版されて企画の向かう先をわかりやすく示すことができ、加えて、東京大学出版会『教養のためのガイドブック』とNTT出版『（反）哲学教科書』とを性格の異なるタイプの導入テキストとして使用することができたのは幸いだった。

ただ、幾つも企画を立ち上げ積み重ねていくと使える商品に限りが生じてくる。所詮、個人のちっぽけな頭の中で考えることだから仕方ない、と言い訳もできる。けれど不特定多数の顧客が見込めない、人の流動性が小さい町の零細書



筆者近影

店にあつて「同じでつまらない」「この内容にはウンザリ」というお客様の失望と落胆の囁きは致命的である。時流に関係のない定番商品には多くの人々の目に触れる機会を少しでも与えたい。だがそのみを頼みとしていくとすぐに行き詰る。だからこそ、テーマに沿った商品をその都度、新たに見出し独力で準定番を作り出す姿勢が問われるのである。たとえ建築学やデザイン論の商品が棚に一冊もなくその知識が全くなくとも、本当に必要ならば出版社に主旨を説明して教えを請い協力を得ること。話し合うこと。この地味な努力を続けないと、お客様の足は間違いなく遠のいていく。

実は、この「コミュニケーション」に関する企画を展開するには別の理由もある。これを人の、生の事象との関わりというかたちで捉え直すと、変化と多様性の進む生活の諸状況（とくに消費生活）の中で、どんな人たちが今何を求めているのか、その手がかりを掴むことができるからだ。はじめに「若い世代は本当に教養ということに関心を示さないのか」という素朴な疑問があつた。企画の結果、単に「教養」と名付け古典的なものを配しても動機付けを行うことは以前にもまして難しい。が、今ある自分にもっと近い場の内容を正面から論じたものなら、「面白い」「知りたい」「考えたい」という欲求を引き出すことはまだ可能である、と再確認できた。恐らくこの世代にとつて、古く堅苦しい言葉の枠組みに拘束されることや、また自分たちが繰り出す新たな言葉の行く先を丁寧に検証することは、憂鬱で厭わしいだけであろう。形もその中心も漠然として、絶えず内容が更新されていく速い動きの中で、自らの位置を推し測る尺度を持ちなさい、と何の手立ても用意もせず論したところで、それはただの無理な要求と映るのかもしれない。

最後は妄言である。「話を通じない」のは、恐ろしく利巧で最も厄介な、直接には物言わぬ「脳」という存在の密かな策略ではないのか。最近、そう疑うようになった。実際、「脳」が何かを目論んでいたとして誰にわかるだろう。実はこの主との対決なのだと考えた途端、すべてが無駄に感じられ虚しくもなる。否そうだとしても、私自身のおよそあまり強くない意志を様々な企てに変え、刺激として発してみる。そしてその中にたつたひとつでも冴えた有効なものが見出されたなら、一見秘密主義の、閉ざされたような系の中にあつても必ず、反応と変化＝言葉は生じる、と信じたい。

（にしお　みのる・はせいち新田辺店）

十五分で読む「身体論」

手紙の末尾に「御身お大切に」とか「ご自愛ください」と添える人はもはや今日では少ないのかもしれない。ここで気づかわれている「御身」とは、また愛すべき「自分」なるものとは何なのか。ふと立ち止まって考えはじめると、それは身体といった言葉では言い尽くせないもののようにも見えてくる。相手の健康状態、身の所在、その消息すべてをいたわる「御身」という言葉――。

死に際まで傍らにあつて、なぜたりさすったりした肉親の身体ほどいとおしいものはない。その生命としての活動が終焉を迎えたのだと医師が実証し、死亡時刻を告げ知らせたにもかかわらず、此の世での生命活動を終えたはずの肉体にまだ残る温もり。みぞおちに手をあてれば伝わってくる、まだ呼吸をしているかのような感覚。生きているかのように錯覚させるいくつかの兆候が徐々に消え行く様を追いかけてながら、その身体への執着が、

わけもなく増していくことに思わずたじろぐ……。遺体への執着――それは死せる者への執着であると同時に、遺され息づいていることを未だ赦されている自らの生への執着であるのかもしれない。

身体――この不可思議なるものへの想いは、古来、多くの人間を魅了してきた。自分の中に巢食う抗いがたい衝動の根を身体のせいにする事で、知性や理性を優位なるものとしてきた思想然り。また、長寿への願いに突き動かされた養生の技法も然り。

身体をめぐる思想や技法の数々を私流に大まかに分けてみると、まず、精神や心との闘争という構図のなかで、精神による身体の統御を説くにせよ、身体 of 精神からの解放を説くにせよ、そこには常に身体を精神よりも抑圧されたものとして捉える発想があつた。それに対して、そんな近代的な身体観への反省から、身体にこそ人間性

鈴木 晶子

復活の手がかりを見いだそうという流れが登場してきた。そして身体が精神か、そのどちらが優勢かといった具合に黒白の反転ゲームであるかのように扱い、身体をめぐって毀誉褒貶の歴史が繰り返されてきた。だが、身体は自らは語らない。その身体にいかに語らせていくのか——語らざる身体と言語表現との格闘は新たな身体論の地平をいま拓きつつある。そんな身体をめぐる様々な思想や技法のなかから、いま入手可能な本を中心にその一部を紹介してみたいと思う。

一 身体を探る

一九六〇年代後半以降、抑圧された身体をいかに解放するか、さらには身体から精神活動を含めた人間をトータルに語る方法はないかという観点から、身体をめぐる思想や技法は一気に「身体論」なる様相を呈してきた。そして、哲学、社会学、人類学、心理学、芸術など様々な分野において「身体」という切り口から人間を語る学際的な関心が吹き出してきた。それぞれの専門領域において身体という切り口が重要な意味をもち、また、身体をめぐる学際的な研究の必要性が唱えられ始めたものもこの頃であった。

もちろん身体をめぐる思想の古典といえば、ヴァレリイ『カイエ』（筑摩書房）、ベルグソン『創造的進化』、『物質と記憶』（ともに、白水社）、メルロー・ポンティ『眼と精神』、『知覚の現象学 1・2』（ともに、みすず書房）などが、この時期、脚光を浴びた。そうした西欧思想を土台として、東洋的身体観をも視野にいれて論じる一連の思想傾向のなかからは、多木浩二『眼の隠喩』、『生きられた家』（ともに、青土社）、市川浩『精神としての身体』（勁草書房）、同『身体の現象学』（河出書房新社）、同『身の構造——身体論を超えて』（青土社）、坂部恵『仮面の解釈学』（東京大学出版会）、中村雄二郎『魔女ランダ考』（岩波書店）、湯浅慎一『知覚と身体の現象学』（太陽出版）、湯浅泰雄『身体——東洋的身心論の試み』（創文社）など泰斗の著作に枚挙のいとまがない。

だが、精神に身体を対峙させ、その相克のうちに身体に思想超克の新たな可能性をみようとすることの身体論ブームなるものは、一つの壁につきあたったといえる。というのも、身体なるものについて語ろうとした人々は、「身体」あるいは「身」として括ることで汲みつくせない身体なるものの捉えがたさの前で、「身体」として語り出した途端に、何かが手からこぼれていく空しさに気

付かざるを得なかったからである。身体論で取りざたされる「身体」なるものは、所詮、精神の鏡に映る身体像であり、身体イメージにすぎないのではないか。生身の身体はどこにあるのか？ 身体論が突き抜けた先には、身体のリアルさを渴望する妙な「身体リアリズム」が生き残っていった。

そして、いま、精神と身体の二元論、イメージとリアルの二元論の枠組みで精神・身体、イメージ・リアルの黑白反転の思想ゲームに取り込まれ、半ば空洞化しつつあったこの身体をめぐる思想や技法は新たな局面を迎えつつある。それは、精神と身体、イメージとリアルの裂け目から、精神と身体を境界づけていたもの、身体性と生身の身体の世界面を形作っていたものに、具体を介して近づこうとする様々な試みとなって現れているようである。

身体をめぐるこうした動きをとりあえず押えておこうと思ったとき、取っ付きやすさからいつてもお薦めなのは、東大駒場の表象文化論の授業を髣髴とさせる小林康夫・松浦寿輝編『身体。皮膚の修辭学』（東京大学出版会）、また、現場性・身体性・批評性から近代の知をその近代の内部から破つていこうとする栗原彬・小森陽一・佐藤学・吉見俊哉編『越境する知 1 身体…よみがえる』（東京大学出版会）である。また、「人間とは何か」という観点から身体に光を当てた藤田正勝・松丸壽雄編『欲望・身体・生命「人間とは何か」』（昭和堂）、京都大学人文科学研究所「身体の近代」共同研究班による菊地暁編『身体論のすすめ』（丸善）も、身体をめぐる現在の議論レベルとその射程を知る上で参考になる。フランスの構造主義、ポスト構造主義の流れをくむ、このような身体をめぐる学際的な関心を理解するには、

金森 修

遺伝子改造

粘り強い思考実験により、現代優生思想の展開を跡づける。3150円

F. ドレツキ／水本正晴 訳

行動を説明する

双書 現代哲学1

因果の世界における理由 理由の役割を自然主義的に説明。3570円

赤林 朗 編

入門・医療倫理 I

倫理と法の二つの軸で考える。最も標準的・体系的教科書。3465円

三田図書館・情報学会 編

図書館・情報学研究入門

文献により研究の最新動向と主要テーマを詳しく紹介する。2835円

大石 裕

ジャーナリズムとメディア言説

「不可視の権力」を探り、ジャーナリズム批判の一步先へ。3885円

*価格税込

劔 草 書 房

<http://www.keisoshobo.co.jp>

〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1
TEL 03-3814-6861 FAX 03-3814-6854

もちろんその源流であるフーコー『臨床医学の誕生』（みすず書房）、同『言葉と物——人文科学の考古学』（新潮社）、同『監獄の誕生——監視と処罰』（新潮社）、ドルー・ガタリ『千のプラトール』（河出書房新社）も読まなくてはならないだろう。

このように、現象学、表象文化論、記号論など、身体を現象や表象文化、記号あるいはテキストとして見立てることを通して、人間を多層的に把握しようとする試みとしてドイツ語圏での動きを知るには、ヨーロッパで注目されているベルリン自由大学歴史人間学研究所のグループが中心になって編集したCh.ヴルフ編『歴史的人間学事典 2』（勉誠社）が役立つだろう。ドイツの伝統的な哲学的人間学とアングロサクソンの文化人類学、そしてフランス歴史学の心性史を基盤とした歴史人類学（もしくは人間学）の観点から、身体をゲノム、脳、皮膚、眼、耳、口、手、座ること、運動、ジェスチャー、感情、エクスタシー、猥褻といった観点から取り上げており、独・仏・英語圏でいま、身体にどのような関心が向けられているかを知ることができる。

身体を身の丈から考えていくというスタイルは、ポストモダン的な思潮の日本における表層的な流行が一過したあとで、哲学領域から地道な思索となつて登場してき

た。とりわけ自らの体感や体験を土台としながら思索していくことを通して、そうした視点でなければ語りだし得ない身体なるものへのこだわりは、生身の身体の臭いを感じさせ、今後の身体論の可能性を感じさせる。こうしたスタンスを先取りしていた三浦雅士『身体の零度』（講談社）、同『考える身体』（N.T.T出版）に続いて、宇野邦一『アルトール 思考と身体』（白水社）、黒崎政男『身体にきく哲学』（N.T.T出版）、内田樹『私の身体は頭がいい。非中枢的身体論』（新曜社）などがある。

二 技法からみた身体

身体をめぐる思想が、精神から身体を、また身体から精神を照射・逆照射しているあいだに、この二元論的思考形式のなかには収まりきれないものをつかまえようと、技や術、技法から身体を探ろうとする試みも身体論のもう一つの軸となっている。身体に刷り込まれた文化を技法として読み解くことを通して、身体に文化を語らせていく試みは、文化人類学や芸術学、教育学、心理学などの領域で、身体の技法の分析を通して進められた。

もはや古典的位置づけもされようとしている文化人類学や民俗学の視点では、『文化と両義性』、『文化の詩学

（Ⅰ・Ⅱ）（ともに、岩波書店）、『道化の民俗学』（新潮社）など山口昌男の一連の著作、「身体技法」という概念から技能の社会的、文化的、歴史的考察をしたM・モース『社会学と人類学 Ⅱ』（弘文堂）、その他、M・ダグラス『象徴としての身体』（紀伊國屋書店）、F・ルークス『肉体——伝統社会における慣習と知恵』（マルジュ社）などは、身体と言語、身体とパフォーマンスという軸で考える上でいまでも重要である。

歴史としての身体という観点からは、色々あるが、中でも身体を切り口とした歴史研究の可能性を示唆するものとしては、池上俊一『歴史としての身体——ヨーロッパ中世の深層を読む』（柏書房）、黒田日出男『王の身体王の肖像』（平凡社）、市野川容孝『思考のフロンティア身体／生命』（岩波書店）、氏家幹人『江戸の少年』（平凡社）を挙げておきたい。身体と心の病理という観点から近代における身体論の成立と抑圧の弁証法を取り出してみせたバーカー『振動する身体——私的ブルジョア主体の誕生』（せりな書房）、またジェンダーの視点からは、B・ドゥーデン『女の皮膚の下』（藤原書店）、また、イリイチ『脱病院化社会』（晶文社）、同『シャドウ・ワーク』（岩波書店）も忘れてはならないだろう。

身体教育、とりわけ身体加工という観点から教育へ

の批判的アプローチをしたものとして、前掲の歴史人間学（人類学）の観点からはE・ケーニヒ『身体——知——力。身体の歴史人類学的研究』（不昧堂出版）がある。日本舞踊の学びの様式の中に技の学習を見ようとした生田久美子『「わざ」から知る』（東京大学出版会）は、伝統的な学びの様式にみる修練や修行の解明に大きなはずみとなった。認知心理学の領域では、技の学習にみられる身体、またその身体の置かれた状況や場に着目したJ・レイヴ・E・ウエンガー『状況に埋め込まれた学習 正統的周辺参加』（産業図書）、福島真人編『身体構築学 社会的学習過程としての身体技法』（ひつじ書房）を挙げておきたい。

三 黙した身体に語らせる

身体はそもそも黙して語らない。だが、その黙した身体に語らせるための手だてが様々な形で試みられているという点が、今の身体論の一つの特徴といえるだろう。それは、自らの身体を直接に関わらせるを通して、体験や体感から語り出すという手法であったり、あるいはまた、実際に技の伝承に携わる人々と場を共有しながらそれを内在的に記述していくような手法であったりする

るが、そこに共通しているのは、これまで比較的黙して語らないことを通して技の伝承を守ってきたジャンルから言語を通して発信していくという姿勢である。

もちろん、このような試みは別に新しいものではない。例えば、密教的身体を自らの修行体験を通して解明しようとした中沢新一『チベットのモーツァルト』（せりか書房）もその一つだろう。音楽の演奏や演劇、舞踏から身体を論じたものとしては、「橋の会」運営委員として自ら能の現場に関わる松岡心平の『宴の身体。バサラから世阿弥へ』（岩波書店）、自ら音楽演奏に関わりながら西洋音楽史への身体論的アプローチを試みたグループによる岡田暁生監修『ピアノを弾く身体』（春秋社）、フランスに拠点を置き長年にわたり自ら創設した国際演劇学校で指導にあたってきたJ・ルコックの『詩を生む身体ある演劇創造教育』（而立書房）などがある。また、黙した身体に働きかけることで新たな地平を開く可能性をみる教育の分野からは竹内敏晴『ことが劈かれるとき』（思想の科学社）、同『教師のためのからだとはことば考』（筑摩書房）、斎藤孝『身体感覚を取り戻す』（NHKブックス）、『教師Ⅱ身体という技術』（世織書房）などを挙げるができるだろう。

修練や修行を通して常に磨かれていくべき身体——こ

の観点から身体をみる限り、技は常に何か特別なものように思われてくる。だが、私たちが朝起きて、夜眠りにつくまでの様々な日常の所作にも、もちろん達人の技として看板を掲げるような類いの技ではないにしても、それぞれにある種の技（アール、アート）が潜んでいるとみることもできるかもしれないのだ。芸術が一つの技の道となったとき、それは芸術家としての道であると同時に人間として生きるべき道でもある。職人芸や武道・武芸を突き詰めていく際、職人である前に、また武芸者である以前に人間であるということ自体が問われてくる、ということは古くより多くの伝書の類いが伝えるところである。

日々の様々な所作に埋めこまれた技、その小さき技から達人の大きな技を同じ地平のものとして捉えることで、身体のもつ多層性にまた新たな光を当てることが可能になる。それは何も東洋に限った試みではない。M・セルトーは、そんな日常実践の作法にみる小さき技の發現と伝承に着目し、小さき存在にすぎない一般の民衆がいかなる権力の支配に対しても、自分独自の姿勢や歩み、話しぶりといった固有性の發現を通して弱者の知恵を駆使していく様を技法として捉え、『日常実践のポイエティック』（国文社）を著した。そこに見えてくるのは、

技も、またそれを駆使しているはずの身体も、実は常に他との関係性の中で立ち現れてくるものだ、つまり二者が共有する場、その間（あわい）こそが技や身体技法を可能にしているのだというメッセージである。

武道、武術の領域では、松聲館道場を拠点に武術を基盤とする身体技法の実践研究を長年培ってきた甲野善紀の一連の仕事、『身体から革命を起こす』（田中聡との共著、新潮社）、『古武術に学ぶ身体操法』（岩波書店）、『武学探究 その真を求めて』（養老孟司との共著、PHP出版）がある。古伝の武術の術理を探究することから出発して、その術理のもつ可能性を野球やバスケットなどの現代スポーツをはじめ、介護、音楽などにおける身体扱いにまで広げていく発想の根底には、身体と身体との間（あわい）への眼差しが常にあるといえる。

四 身体の間（あわい）に託す

身体がそれ自体として、ある個体としての人間にのみ所属する独立したものではなく、他の身体との関係性のうちに、つまり（身体と身体との間（あわい）をなすもの）をこそ身体として見立てることが可能ではないか、という発想は、身体論に新たな地平を拓くことになるだろう。それは（死と再生の間（あわい）にある身体）というものの本来の姿へと迫る可能性を秘めているといっている。身体の技ないし身体技法なるものを捉えようとする際に、私たちは得てして、ある形象となつて表に結果として残ったものを技として捉えてしまっている。それは、身体を個体としての境界があるもの、つまり古代ギ

アウシヴイツツの 〈回教徒〉

現代社会とナチズムの反復

●柿本昭人 ナチ強制収容所において、生きる価値を持たない者として焼却処分にふされた「回教徒」とは誰か？ 恐るべき選別と絶滅の記録から、現代社会を規定し続ける「思考のナチズム」を問う。 3675円

生きる幻想・死ぬ幻想

●岸田秀・小滝透 一神教とその亜種であるイデオロギーの弊害を明らかにし「大物語」なき時代の生き方を探る。 1995円

ディオニソスの美学

●高橋巖 バッハの『フーガの技法』からシュタイナーの色彩論まで、芸術作品の本質を縦横無尽に語り説く。 2310円

春秋社

東京都千代田区外神田2-18-6
☎03-3255-9611 FAX 03-3253-1384
<http://www.shunjusha.co.jp/>

▶価格は税込

ロシア以来のアトミズム的なものと捉える発想である。だが、私の身体というものが、実は明確な境界面を予め設定することによって外の世界と接しているのではなく、外の世界との関係性において、境界がその都度立ち現れるような形で成立するようなものだとしたらどうだろうか。

これは、身体を個別で自律した個体とみなすことによつて、他の身体と関わるということとを、「予め分断された個々の個体を再び何らかの拡張子によつて繋ぐこと」としてイメージする従来のコミュニケーション論、人間関係論に対して新たな視座を提供するかもしれない。私たちの身体は実はそれぞれに独立して分断されてあるのではなく、その関係性によつて互いの間に、ある暫定的な境界が生まれてくるようなものだと考えたとき、とりわけ身体の死と再生の現場に大きな影響をもち得るのである。

植物状態の患者専門の病院での調査をもとに看護学の専門から書かれた西村ユミ『語りかける身体——看護ケアの現象学』（ゆみる出版）は、そんな可能性を秘めた好著である。もはや何も訴えかけることのできないはずの患者の、言葉にならないはずの言葉に耳を傾けることを通して、看護者が患者との関わりのなかで自らも変容

していくという、臨床的関係性の原点に触れている。解説にかえて添えられた鷺田清一の「臨床のまなざし、現象学の思考」は身体論のいまを考えるための導きの糸となるだろう。同じく鷺田『現象学の視線——分散する理性』（講談社）、木村敏『偶然性の精神病理』（岩波書店）、同『生命のかたち／かたちの生命』（青土社）、同『分裂病の詩と真実』（河合出版）も、〈死と再生の間（あわい）〉について考える手がかりとなる。

臨床の場において響き合い影響し合う相互性について考えるには、心身の痛みというものの不可思議な連動性や主観による痛みの強度の違いを論じたD・B・モリス『痛みの文化史』（紀伊國屋書店）、臨床における関係性から身体を考えようとしたならば、立川昭二『臨死のまなざし』（新潮社）、立岩真也『弱くある自由へ』（青土社）、上田敏『リハビリテーションの思想』（医学書院）などは、医療の現場という実に切迫した状況において、「患者の身体を医療者の身体が扱う」という、医療行為、看護行為のごく当たり前の事柄をいま一度新たに考えてみるよすがとなることだろう。

五 「御身お大切に」

手紙の末尾にさりげなく添えられた言葉「御身お大切に」が、いまや、近代の身体観でいうところの「身体」では汲みつくせないものを含みこんでいることは明白である。互いに「御身」を慮りつつも、避けることのできない死。無常のもの、朽ち果てていくものとしての身体が相互に、〈死と再生の間（あわい）〉で関係性の痕跡を為していく様相——それを私たちは生と呼んでいるのかもしれない。アリエス『死と歴史』（みすず書房）、J・マクマナーズ『死と啓蒙 十八世紀フランスにおける死生観の変遷』（平凡社）、前掲の立川昭二による『生と死の美術館』（岩波書店）は、身体をめぐる思索の長い歴史をしてもすくいきれないまま私たちの前に立ちはだかり続けている、この身体なるものへの接近という、人間の欲望と傲慢さに想いを馳せる契機となるだろう。

結局のところ、身体を理解しようと書物に向かつて、そんな人間の徒勞をわらうかのように身体はするりと逃げていってしまう。そもそも身体なるものは、言葉で捉え切れないがゆえに身体だといってしまった方がすつきりする。身体を極めようとする試み——それはいわば言

葉の零度への回帰だといえる。だが、その回帰は言葉によって古今様々に刻まれてきた書物を介してこそ可能となる零度である。なぜなら、書くという行為も、読むという行為もまた身体行為だからである。

身体論とは、実は語らざる身体が、身体ゆえに紡ぎだす何かを捉える試みなのかとさえ思われてくる。それならば、多くの先達が、〈言葉にすることと敢えてしないこととの間ぎ合い〉をめぐる様々な思索を重ねてきていたはずだ。西田幾多郎『善の研究』（岩波書店）、鈴木大拙『大乘仏教概論』（同）、三木清『構想力の論理』（同）などは、主客未分の域、言い替えれば精神や身体、主観や客観といった西洋哲学的な二元論の枠の発生の源流を遡上する試みとして新たに読み込むことも可能ではないだろうか。おそらく、このような身体へのまなざしは、文芸はもとより詩歌、散文、映像、絵画といった様々な表現スタイルに託されてきているはずである。ここでは、〈死生の間（あわい）〉を言葉で紡いだ珠玉の散文として、野口整体の創始者である野口晴哉に嫁ぎ、整体を通して死生をみつめ続け、昨年亡くなった野口昭子による『朴歯の下駄』、『見えない糸』（ともに、全生社）を挙げておきたい。

以上、身体論の拓く新たな地平からその一部を紹介し

てきた。痕跡を痕跡にしているもの、身体、技、言語の表現力学を説明するには、哲学や宗教など既に確立されたジャンルにこだわるだけでは十分ではないだろう。身体の零度を渴望する私たち人間。その〈死と再生の間（あわい）〉を照らす指針の書がいまこそ求められているのではないだろうか。

鈴木晶子（すずき しょうこ） 京都大学大学院教育学研究科教授（文学博士）。

専門は教育思想・哲学、表現論、死生の人間学。

言語や映像など表現の様々なメディアを通して人間の変容に迫る学際的な視座および技法を探究する立場から、六年前に「教育詩学」(Poetics Paedagogica)を立ち上げた。その成果は冬号舎より近刊の予定（これは教育学ではない——教育〈詩〉学叙説、同じく写真と文章によるコラボレーション『あわいの〈詩〉学』。主な著書、『判断力養成論研究序説』（風間書房）、『現代教育学の地平』（共著、南窓社）『教育文化論』（共著、放送大学教育振興会）など。

名古屋八書店合同フェア・レポート

——『教養のためのブックガイド』刊行記念ブックフェア・講演会

前田 文雄

中部国際空港開港、愛知万博開幕と何かと注目される名古屋で、共同のフェアを五月から六月にかけて開催した。参加書店は、旭屋書店名古屋ラシック店・紀伊国屋書店ロフト名古屋店・三省堂書店名古屋テルミナ店・三省堂書店名古屋高島屋店・ジュンク堂書店名古屋店・ちくさ正文館・マナハウス・丸善名古屋栄店の八店舗。

フェアの内容は、東京大学出版会の新刊『教養のためのブックガイド』で紹介されている書籍でブックフェアを行い、その記念として講演会を開催するものだ。ブックフェアのセレクトは各店にまかし、特に割り振りはあえて行わなかった。各店の担当者がそれぞれキャリアをつんでいるのでそのほうが面白いと考えたためである。いわば『教養のためのブックガイド』という素材を各店の切り口で読者に提供しようというもので、担当者の力量が試されるフェアでもある。

開催時期は五月中旬～六月中旬に各書店の都合に合わせるで行うことにした。各店によって様々なフェアの予定を組んでおり、同時にスタートすることは無理なのでこういう形になった。フェアの時期を前半・後半にわけ、それぞれ違う内容で行った書店もある。その他ポスターや整理券の作成など事務的なことは三省堂書店と丸善で担当した。参加書店には講演会の告知ポスターの貼り出しと入場整理券の配布をお願いした。

記念講演会は『教養のためのブックガイド』編者の小林康夫東京大学大学院総合文化研究科教授をお招きし、「読むことのすすめ」と題して五月二一日（土）にテルミナ（名古屋ターミナルビル）八階の会議室で開催。講演会の告知方法は、ポスターの貼り出し、各店のホームページへの掲載、新聞広告の枠を持っている書店には、そこへの掲載をお願いした。マスコミへも取材依頼をし

だが、こちらは残念ながらうまくいかなかった。

講演会参加者は約八〇名。読む人のイメージを広げる、本だけが持つ力について小林先生が熱く語られたのが印象的だった。参加者からは講演の感想以外に、八書店共同のイベントということを好意的に取っていた、だいている方もおられた。また、〇〇書店の△△さんから講演の案内をいただいた、など書店員とお客様との日常のつながりが垣間見られ、興味深いものがあつた。

他県にもれず名古屋も「書店戦争」と呼ばれて久しい。一方で読書人口の減少については書店員の誰もが危機感をもっていることが、このフェアに参加いただけただけ理由

名古屋 8 書店合同企画

『教養のためのブックガイド』刊行記念 ブックフェア & 講演会のお知らせ

【講演会のご案内】
講師：小林康夫（東京大学大学院総合文化研究科教授）

「読むことのすすめ」

「大学改革」のなかで数少なくなった教養学部の一つ、東京大学教養学部が教養教育の実践として新入生に提示する『教養のためのブックガイド』（東京大学出版会、2006年3月刊）の刊行を記念して、編者の小林康夫先生が本を読む楽しみについて語ります。

日時：2005年5月21日（土）13:30開場 / 14:00開演
会場：テリミナ8階（愛知県名古屋市中区名駅一丁目1番2号）
入場無料 定員80名（要型埋め）
※整理券は下記フェア開催店店頭で配布。定員に達し次第締め切ります。

【フェアのご案内】
※フェアは5月中旬から6月中旬にかけて下記各書店にて開催されます。『教養のためのブックガイド』に紹介された書籍を中心に、それぞれ個性豊かな品揃えとお客さまのご来店をお待ちしております。詳細は下記各書店ご連絡先にお問合せください。

（主催：フェア開催店）	
旭屋書店名古屋ラシック店	TEL052-238-0219
紀伊國屋書店テリミナ名古屋店	TEL052-265-2621
三省堂書店名古屋高島町店	TEL052-966-8877
三省堂書店名古屋テリミナ店	TEL052-562-0077
ジュンク堂書店名古屋店	TEL052-589-8321
ちくま文庫書店	TEL052-741-1137
マナウス	TEL052-571-2771
丸善名古屋栄店	TEL052-261-2249
協賛：東京大学出版会	TEL03-3811-8814

フェアと講演会のチラシ

の一つかもしれない。また人文会を通して顔見知りの書店員が多く、話を進めやすいことも大きい。社と社は「商売敵」かもしれないが、一書店人としては「戦友」（古い表現だが）という感覚がある。さらに書店発信のフェアを単独で開催するよりも複数書店で協力できれば広告宣伝効果も大きいし、一書店の負担も軽くなる。

講演会の集客やブックフェアの内容については検討すべき点も多いが、初めての取り組みにはよくできた方ではないかと自負している。

さらに、版元の東京大学出版会から積極的な協力をいただいた。担当の方にはたいへんな負担であったと思われるが、粘り強く資料を作成していただいた。この協力がなければスムーズにはいかなかっただろう。また書店側では気づかないことも指摘いただき参考になった。

書店によって様々な条件がある中でいろいろな形のイベントを行い、本と読者の出会いを演出し、読書の楽しさをアピールしようと思っている。次回、もし開催できる条件があれば数書店でもかまわない、難しく考えないで出来るところからはじめれば良い。幸い名古屋には、ベテランの書店員と若い書店員との年代を超えた交流もある。この条件を生かして、今回のような共同フェアを続けたい。

（まえだ ふみお・現丸善店舗事業本部）

広島書店合同企画「教養としての哲学」を終えて

木村 斉

きっかけは酒盛りだった。人文会の会員社ではないけれどもある人文系の出版社S社の方が一度広島を訪れた際、紀伊國屋書店のH氏、広島大学生協のU氏、ジュンク堂書店のA氏、I氏を募った酒宴の席に私も呼ばれた。酒宴はI氏がアイドルで大盛り上がり、二次会三次会と果てしなく繰り出した。そのときの記憶の断片に「人文書売らなきゃ本屋じゃないよネ。」「地方だと出荷を渋られる。」「一緒に何かできないかなあ。」など、会話の一部が残っていた。

十年以上前だろうか、京都の複数の書店が協同で開催した「心理学」のブックフェアを思い出した。地方で大型書店を開店させるさい、その広いスペースに収まるべき本の調達が難しい。人文書はそのシェアの大部分を首都圏と関西圏で占めるマーケット構造だから、出版社は地方書店へ出荷を渋る。販売機会を重ねることが担当者

育成の最大の手段だとしたら、地方では人文担当者は育たない。これにネット通販が拍車をかける。出版社が地方の書店を切り捨てる傾向は高まるばかりで、独自に出版の中央集権化に風穴を開けるしかなかった。

「哲学」だ。人文書の棚が熟成され、最後にお客様に認知されるのは多分「哲学」で、哲学書の売れる書店は人文書支持が厚い。急がば廻れ：簡単な企画書を携え、広島市内各書店の店長の元に直談判する。皆さん「いいネエ、やろうよ。」と熱いエールを送ってくれた。酒酔いの戯言が現実味を帯びつつあった。

中央突破！：カウンタパンチでノックアウトされようと東大出版会の大江局長（前人文会代表幹事・現JP O事務局次長）を訪問した。お忙しい勤務の中、わざわざ休日にお時間を取って下さった。京都での成功例を含



講演する古東先生

め開催までの手順を懇切丁寧に教えていただいた。何よりも人文会のトップから好感触を得たのは大きい。哲学のフェアをするのに人文会から協力を得なければ始まらない。人文会定例会に諮っていただき晴れて人文会の協力を得ることが出来た。

ブックフェアには「冠」が重要なので、とびきりの冠を考えていた。なんのアテもないけれど、広島大学総合科学部教授の古東哲明先生だ。勁草書房『へ在る』ことの不思議の著者と言った方が馴染みやすい。さっそく研究室に電話をかけるも反応無し。メールもブロックされて届かない。もう、年の瀬でキャンパスには人気が無いのか？ 暗雲垂れ込めたが強い味方がいた。広島大学生協のU氏だ。なんと、先生の自宅メールをご存知と言う。U氏に仲介していただき大晦日一二月三一日に先生からのメールが届いた。活字文化への危機感先生も共有されており、企画の趣旨に賛同してくださった。

年が明け「年賀」の挨拶がてら広大の研究室へ向かう、先生も上機嫌で迎えてくださり「良書」の駆逐される出版界の現状を憂い、再度賛同してくださった。こうなれば矢継ぎ早にお願いを畳み込む。「連続講演会を」「ブックリストに先生の推薦を」「目録に巻頭言を」、最後に「講演料をお支払いできないので…」と持ちかけた時、

「私は臨床哲学を実践しています。ソクラテスのように機会さえあれば何処でも出かけて話をします」。この言葉に感銘を受け、全て順調、ブックフェア開催を待つばかりと思えた。

ここからは人文会販売委員会研修グループのかたがたにお骨折りをいただいた。参加書店各氏より希望リストを募り「古典哲学・倫理学」「社会哲学」「フランス現代思想」「現代哲学」そして「カルチュラル・スタディーズ」の五つのカテゴリー各三十点のリストにまとめ人文会各社の了解を研修グループのかたがたに託した。それぞれ編集のかたがたも巻き込んで品切れやISBNから税込価格までチェックをいただきタイトルも決まった。「教養としての哲学」チョット鼻持ちならない気もする「教養」だけど、やはりその人の人格が垣間見えるのは「教養」でしょう。

平成十七年の干支酉年にも慣れた一月の下旬、いよいよ古東先生の審判が下る。メールに添付したリスト第一稿に先生の回答はNGだった。まず、カテゴリー分類の不備を指摘された。「古典哲学と倫理思想を一緒にする理由が不明」。いやー、哲学入門の意味も込めた古典だったもので…。「社会哲学と実存哲学を一つにすることにとっても抵抗を感じる」。安易でした。先生はハイデガ

ーの研究者だったのです…。「現代哲学とはこのリストのごく一部でしょう」。ポストモダンとは別の現代ということ…。「カルチュラル・スタディーズは今回の〈売り〉として腐心されたのでしょうか、半分以上は別ジャンルでしょう」。お察しの通りです。目一杯ふくらませました…。研究者にとつて、ご自分のフィールドに安易な命名をされることが、いかに失礼な事を拝察出来ませんでした。古東先生申し訳ありませんでした。

決定的だったのは次の一言でした。「なんで、この本なんだよー。恥ずかしいぜ。」んー、人文会会員出版社二十二社から公平に五冊づつ選んだ私の苦勞も分かつてよーなどと、本末転倒なことは申しません。おっしゃる通りです。先生からカテゴリーごとに書目の移動やカテゴリー概念の丁寧なご指導をいただきリストの再構築となりました。研修グループのかたがたが人文会会員社にお話くださり、人文会の同意をもって出版社にとられない「哲学入門・人間思想」「社会思想」「フランス現代哲学」「論理学・科学哲学」「現代思想」の最終稿が出来たのはフェア開催まで一ヶ月を切っていた。

古東先生から原稿用紙十枚にわたる渾身の巻頭言もいただき目録作成にかかる。だが、開催日まで二週間しか無かった。ここで研修グループのかたがたが手を貸して



講演会会場

くださった。校正からデザインまで丸投げでお願いしてしまった。感謝してまーす。

最後の難関がマスコミ動員だ。なんのコネクションもない身では正攻法で攻めるしかない（毎回の事です）。三月九日に広島県の新聞社、テレビ局に軒並み企画書を送付した。人文会にも新聞社への働きかけをお願いした。一週間後電話攻勢をかけるが受付で企画内容を上手く説明できないと、とんでもない部署に廻されて話が噛み合わない。ようやく中国新聞社が興味を示してくれた。さっそく、押売プレゼンを始めると、人文書の窮状とライバル書店が協同歩調を取る事に興味を示してくれた。取材も受け開催翌日に記事となった。当初断られた日経新聞社からも別の部署から取材を受け記事になり翌週には広島テレビの取材も受けマスコミ動員は思いのほか上手くいった。三月二四日のフェア開始日に目録が届き、早速、参加書店に届けると各書店無事立ち上がったようだ。

古東先生の講演はジュンク堂広島店、フタバ図書TEAの連続開催だ。講演会のポスターを店頭に張り出すといよいよ実感が湧いてきた。入場無料で整理券を用意するも埒らない。当店の五日前がジュンク堂広島店の開催日で、隠密でお邪魔するとデパートの別室を用意され

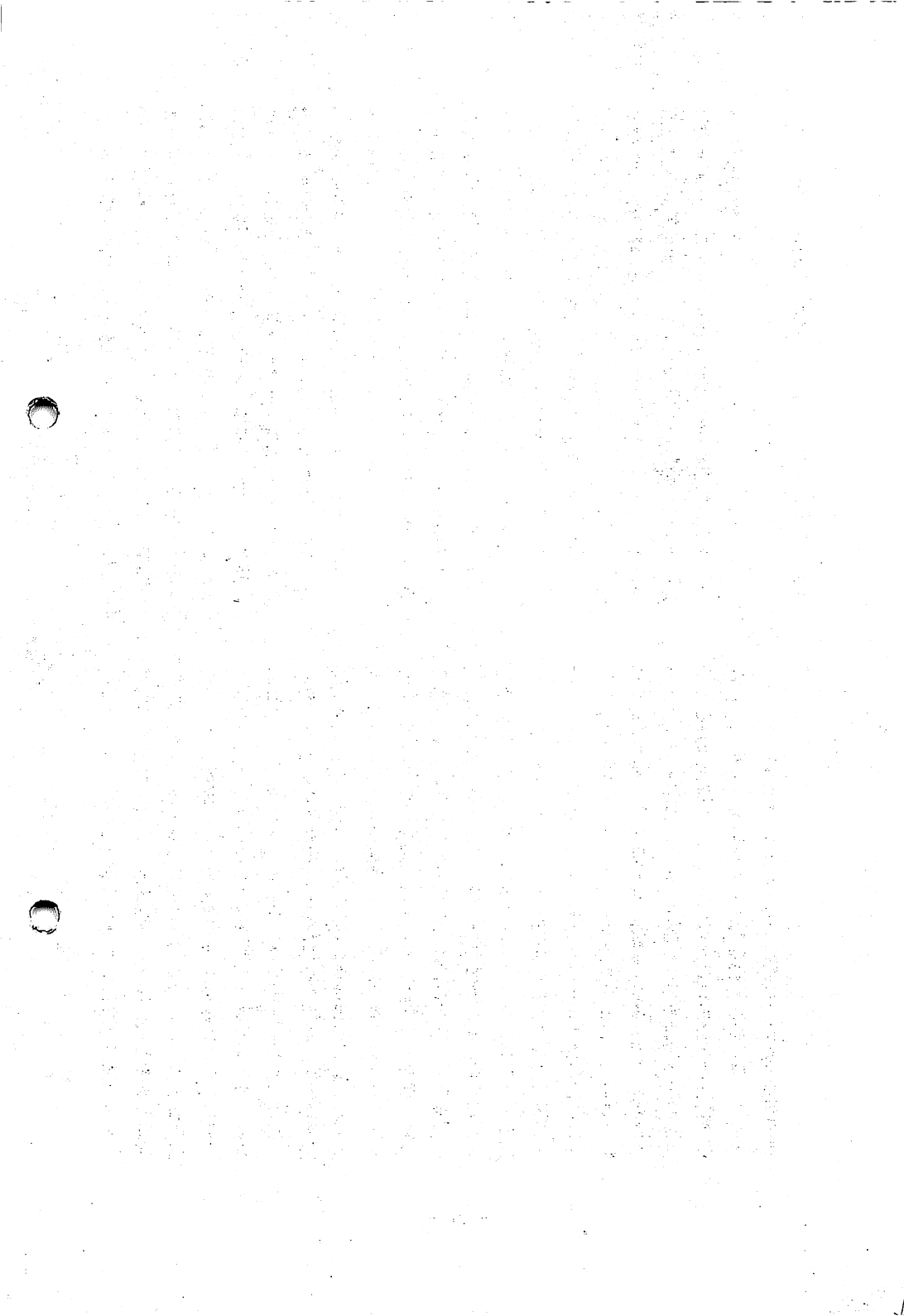
講演会場は落ち着いた色調のゆったりスペースで講演はすでに始まっていた。先生自らレジメを用意され聴講のお客様に配布され、「存在という奇蹟」のテーマで今在ることの神秘をライターの火やコップに注がれた水を例に熱っぽく語っていただいた。最後に辻邦生「回廊にて」から都会の人間関係の不毛さに存在することの喜びを見出そうと仰ったのがとても印象的でした。店長のA氏から紹介されたのを機に「次回はフタバ図書TERAで開催ですー」と宣伝して帰ってきました。

フタバ図書TERAでの講演は店内FMスタジオの音響を用いて行ったが、ショッピングセンターの館内放送に遮られ最適な環境とはならなかった。ここでもレジメを作っていただき「自己―あるいは誰でもない者」のテーマで講演が始まった。店名「TERA」についてギリシャ語からの説明を前置きに字義の解説から「自己」の解釈が始まり、「世界劇場」を超越した「自己」の確立が豊かな人生に必須であることをシェイクスピアや文学の引用で論証された。ジュンク堂から連続して受講された方も多く、書店から読者に発信しうる情報の最良ケースを実現できた。

八十年代に人文書がファッションで売れた時代を経験

した者には、昨今の人文書の厳しさは骨身に凍みます。特に地方の書店には「弱者切捨て」的な出版業界の動向に憤慨される方も多いはずです。地方にも大規模店の出店ラッシュが押し寄せ人文書の出荷が増えていくにもかかわらず売上が伸びないとは出版側の言い分です。地方書店でも人文書をきちんと揃えたい書店は多く、ただ、そのノウハウが不足しているだけなのです。それが方法論であるなら、学び、身に付ける事は出来るはずで、専門書の需要がネット通販だけで賄えられるような状況はいかにも貧しい出版文化です。その意味でも今回人文書の皆さんに様々な協力をいただけたことが、この企画を実現できた一番の理由です。あの頃も何もしないで人文書が売れていたわけではありません。常に書店からの読者への提案があり読者と人文担当者はタイマンで勝負をしていた。バブルの再来を期待しても笑われるだけだが、棚の編集が出来る人材がいて仕掛けられるフィールドがあれば、リアル書店は仮想在庫にまさるネット書店より充実した場を提供できる。それがリアル書店の生き残る唯一の道だと思う。最後にシビアなご指摘と方向性を与えてくださった大江さんに感謝の意を込めて終わります。

(きむら ひとし・フタバ図書TERA広島府中店)



全国図書館大会茨城大会に参加して

——（平成十七年十月二六日～十月二八日）開催

持谷 寿夫

出版物を讀者（利用者）と出会わせることのできる機能を持つ図書館の役割は、書店の店頭と同様に、私たちが出版社が大事に考えている場所です。とくに、発行部数が少なく比較的高価な専門的出版物では、図書館への期待は出版社側からばかりでなく、讀者（利用者）側からも大きくなります。公共・大学・学校・専門と利用する対象によつてそれぞれの機能は異なりますが、提供する情報の基礎には資料があることは間違いなく、その資料の基となる蔵書を各図書館がどう構成しているのかは私たちにとつての大きな関心事です。また、広く深い情報を得る場としての図書館の役割は近年ますます高まつており、図書館で目指す情報や出版物にたどり着いたという例は年々増えつつあります。

そうした多様な機能をもつ図書館のかたがたとの交流は、人文会が独自に図書館グループという委員会を設け

ていることでもわかるように、長年の課題でもありました。本を購入してくれる対象としての顧客という位置づけだけでなく、その先にある讀者をも含めた広がりを求めるには実際の業務に携わる図書館のかたがたの意見が欠かせないと思つているからです。この人文会ニュースでも数回にわたり図書館の関係者の方に登場していただき、発言をしていただいています。近いようでいてなかなか実現できなかった図書館の方たちとの交流、水戸での図書館大会に人文会として参加して実りの多い新しい体験を得てきました。以下はその報告です。

毎年行われる全国図書館大会では、日本書籍出版協会と日本図書館協会の共催で「図書館に備えてほしい本」の展示会を開催しています。毎年各分野ごとの書籍の展示と目録の作成を行っていますが、今年二〇〇五年の展



展示会会場

示図書のテーマは「人文科学の現在と基本図書」人文会刊行の『人文書のすすめⅢ』所収の基本図書に各出版社からの推薦図書を併せて二千冊以上を大会期間中特設会場に展示いたしました。ふだん、なかなか眼に触れることの少ない人文書をこの機会に図書館の方に実際に見ていただき、各図書館の選書の一助に利用していただいたわけですが、多くの図書館の方が来場し一冊一冊を熱心に手にとってご覧いただいている様子がたいへん印象的でした。また、こうした人文書の図書展示の機会に、人文会としても図書館のかたがたへのアピールをしたいと考え、第十一分科会「図書館と出版流通」の会場において代表幹事佐藤英明氏、図書館グループ委員長杉田啓三氏より人文会からのメッセージを分科会参加の図書館のかたがたにお伝えしました。

人文会は現在、人文・社会科学の専門書を出版する十九の出版社で構成する任意団体です。創立は一九六八年（昭和四三年）、人文書の普及と書店店頭における人文書の棚の定着を目的に結成されました。以来、書店や取次の皆様の絶大な協力を仰ぎながら、会員社の入替はありましたが、地道に活動が続けてまいりました。

人文書といいますが、分野は多岐にわたり、内容につきましても一般書と呼べるものから高度な専門書まで非常に幅のあるジャンルであることは、申すまでもありません。書店店頭のものでもどこまで揃えれば読者のニーズに応えうるかが出来るのか、もつとも考慮するジャンルでもあります。また図書館の皆様にとつても、限られた予算の中でどこまで蔵書しておけばよいものか、頭を悩まされるところだと思えます。さらに、人文書ばかりでなく自然科学書等も含めた専門的な分野の読者は、質に対して厳しい評価の眼をもっています。一般的であるのか専門的であるのか、独自性があるのか否か、さまざまな視点から評価を受ける分野でもあるのです。そうしたむずかしい特徴を備えた人文書の指針を何とか作れないものかと、人文会なりにさまざまな試みを積み上げてまいりました。

その第一弾が、『人文科学の現在―人文書の潮流と基本文献』（一九八八年・二十周年記念）の刊行です。基本図書二千五百点と当時の研究者たち（二十人）の最新情報をまとめ、さらにそれぞれ百点ずつの参考文献をあげたものです。書店、図書館における蔵書チェックに相当利用されました。その後、五年ごとに見直しを加え、『人文書のすすめ―人文科学の動向と基本

図書』（一九九三年）、『人文書のすすめⅡ―人文書の流れと基本図書』（一九九八年）、『人文書のすすめⅢ―人文科学の現在と基本図書』（二〇〇三年）を刊行してまいりました。第一回からその反響は大きく、意を強くしてその運営をつづけております。Ⅲでは基本図書が五千二百点にのぼっており、また人文書を七つの分野にジャンル分けし、そのジャンルに従って掲載しています。現在は、そのジャンルの細分化の見直しにも着手し始めています。

次に、「人文会ニュース」の発行です。現在九六号までが発行されています。この冊子は、会の活動の報告はもとより、その分野の先生方からの本の情報、書店現場の声、図書館現場の声、各社の書籍紹介など、その時期に合ったテーマを取り上げるべく編集努力をしています。発行後に各図書館へも配布されていますので、ご覧になった方も多いと思います。九五号には、前鳥取県立図書館長・斎藤明彦氏の論文が掲載されており、注目されました。

こうした冊子等の発行とは別に、人文会では実際に書店や図書館の皆様との交流を図りながら、数多くの勉強会や研修会を積み上げてまいりましたし、新刊や話題書、さらに人文書フェアの案内も差し上げてまい



交流会風景

りました。こうした活動の多くを今年から、人文会のホームページにアップいたしましたのでぜひご活用いただきますようお願いいたします。先ほど挙げました五千二百点の基本図書もご覧いただけます。

全国図書館大会終了後の一〇月二八日（金）午後、人文会と図書館大会に参加された図書館の有志のかたがたによる交流会が茨城県立図書館の会議室で開かれました。人文会からは図書館グループを中心に、歴史書懇話会横井代表幹事（吉川弘文館）も加えた五人のメンバーが出席、図書館に本を届ける大事な役目を担う図書館流通センターの中藤部長にも加わっていただき「図書館における人文関連の選書の現状」、「人文会ホームページの利用方法」を主なテーマに約二時間にわたり意見の交換を行いました。

この交流会に先立ち、人文会では会員各社が図書館に薦めたい本を一冊ずつ選び実際にどれくらいの数が図書館に蔵書されているものかの調査を行ってみました。こうした調査は、二〇〇三年に日本図書館協会と日本書籍出版協会が公立図書館貸出実態調査として実施したものがありますが、今回の調査はいわゆる人文書とよばれる本が、実際図書館とくに公共図書館にどのくら

い蔵書されているのかを可視化してみても、出版社の側と図書館の議論の前提を作ってみようと考え実施したものでした。得られたデータは当然すべての図書館を対象としたものではなく、一概に判断できるものではありませんが、あらわれた初版の発行数と図書館への納入数の関係は少数数の発行であればあるほど、図書館で読者と出会う確率も高くなるということを示していると同時に、出版社にとっては専門性の高い出版物の刊行の大きな励みにもなるものです。個々の出版物の具体的な数字の評価はさておき、発行数千部から三千部の書籍に占める図書館の蔵書の割合は一割くらいと推定できることから、資料費が少ないながらも専門的な出版物を選書しようという心がける図書館の方たちの苦労がうかがわれる結果となりました。出版社側にしても図書館側にしても、こうした専門性の高い蔵書を増やしていく手だてを講じていくことが、今後とも必要という認識では共通しているだけに、折しもその前日施行された「文字・活字文化振興法」の制定とも相まってさらなる具体的な協働が実現できることが望ましいと実感されました。

図書館の方々は地元茨城県の各図書館を中心に八名が参加され、それぞれの現場の実情もまじえながら活発な意見を述べていただきました。私たち出版社に勤めるも

のが知らないことも多くあり、この点でもやはりこうした交流の積み重ねが必要だという意を強くしました。印象的な話しも多くありました。

「普段、あまり需要が少くないと思われる人文書だが、団塊の世代が定年を迎え図書館に回帰しつつある現在、哲学や歴史の書物もそれなりに動き始めている」

「選書では単価三千円くらいがひとつの壁になっている」

「予算が減少している現在、どうしても小説、児童書辞書等が優先されやすい」

「選書に関してはやはり出版社の実績も参考にする」

「インターネットで情報を得て図書館に来館する人が増加している」

「貸出率は気になるが、結果として悪くなくてもそれが選書に影響を及ぼすことが無いようにしている」

「選書アドバイザーという制度を設け、選書の一助にしている例もある」等々

時間が足りないなかでの意見交換でしたので消化不良の感もありましたが、これからの活動のヒントに出来るアイデアを多くいただけた会になりました。最後に人文会のホームページを使った人文書の検索のデモンストレーションをご覧いただき、この後も選書の際のツールとし

て利用していただきたいとお願ひしました。

人文会ではこの後も図書館のかたがたとの交流を深めていきたいと考えています。こうした交流会ばかりではなく、さまざまなかたちでの共同の場を模索していくことが、結果として読者とのつながりを強めていくことになります。ご意見やご希望をぜひ人文会図書館グループま

でいただければ幸いです。

（最後に、今回の交流会では水戸市立中央図書館の坂部副館長にご尽力いただき、会場の設定と図書館のかたがたの参加をお願いしました。会場を提供いただいた茨城県立図書館様と併せて深く感謝いたします）

（もちたに ひさお・みすず書房）

二〇〇五年特約店グループ訪問報告

札幌・千歳方面

報告 吉武 創（勁草書房）

●期日——七月二日（木）～七月二日（金）

●参加メンバー——平石（御茶の水書房）・持谷（みず書房）・佐藤（ミネルヴァ書房）・吉武（勁草書房）

●訪問書店——三省堂書店大丸札幌店・紀伊國屋書店札幌本店・北海道大学生協クラーク店・コーチャンフォー・ミュンヘン大橋店・リーブルなになわ・丸善札幌南一条店・紀伊國屋書店オーロラタウン店・旭屋書店札幌店・文教堂千歳店（計九店舗）

●感想…書店の大型化がさかんに話題になっているなか、全国的に見ても十指に入るような超大型店がこの一年の間にコーチャンフォー・ミュンヘン大橋店（昨年九月開店、書籍売場面積一二〇〇坪）・紀伊國屋書店札幌本店（今年四月開店、書籍売場面積一三〇〇坪）と二店舗も開店した札幌・千歳地区の書店を訪問しました。

まず新しくオープンした二店舗についてですが、両店舗のひろびろとした店内と豊富な在庫量には圧倒されました。また各店舗の特徴ですが、紀伊國屋書店札幌本店の開放感のある空間と明るい店内それに青と白を基調にした書棚はたいへん新鮮でした。またコーチャンフォー・ミュンヘン大橋店は、北海道特有の問題である雪対策として全天候型の広い地下駐車場があり、雑貨・CD・喫茶などを併設してお客様を長時間飽きさせない店づくりをされていました。

一方、既存の書店様についても接客技術の更なる向上やお店ごとの特性を把握し商品構成を見直したり、売場の配置を変えたりして「激戦区札幌」で、売上をいかに確保しさらに伸ばしていくか、いろいろと対策を講じておられました。

札幌駅の再開発により駅前に旭屋書店・三省堂書店が出店し、さらに今年、紀伊國屋書店札幌本店が移転して札幌の書店地図は大きく変わろうとしています。札幌駅から大通りまで地下道が出来るそうで、雪の多い札幌でまた人の流れと書店地図に変化があるかもしれません。

最後になりましたが今回訪問したどの書店様にも充実した「北海道棚」があり、どの書店様も北海道という地域性を大事にし、地元のお客様を大切にしていらっしゃることがよくわかりました。

宇都宮・仙台方面

報告 新保卓夫（誠信書房）

●期日——六月二三日（木）―二四日（金）

●参加メンバー——段塚（紀伊國屋書店）・馬場（吉川

弘文館）・新保（誠信書房）

●訪問書店——落合書店宝木店・落合書店東武ブックセンター・紀伊國屋書店宇都宮店・喜久屋書店宇都宮店・新星堂宇都宮店・八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店・ジュンク堂書店仙台店・東北大学生協文系店・金港堂・紀伊國屋書店仙台店・ジュンク堂仙台北口店・丸善仙台アエル店・八文字屋書店泉店（計一三店舗）

●感想…東京駅から新幹線で一時間弱の宇都宮市は、いつでも行ける。距離のせい、今までグループ訪問の候補地にはあがらなかった。その宇都宮市に今年に入って立て続けに二軒の大型店（喜久屋書店・新星堂）が出店し、一挙に書店激戦地となった。迎え撃つ既存店の対策は？ 今後の書店地図はどう塗り変わるのか？ これはぜひ見ておきたいということで急遽コースに組み入れることになった。立地で大雑把に分けると、駅・駅前が八重洲、新星堂。市街地が紀伊國屋、喜久屋、落合東武。郊外は落合宝木、落合イトーヨーカ堂となる。東京から約一〇〇キロ、人口四五万人程度の街にこれだけ多くの大型店が仲良く分け合うだけのパイがあるだろうか。また、

市街地から郊外へという消費構造の変化も加速しつつあると聞く。まだしばらく目が離せない。

激戦といえ、仙台地区も同様である。三年前にオープンし、好調を維持している丸善アエルに対して、ジュンク堂二店舗の包囲網作戦の行方はいかに？ 孤軍奮闘の金港堂が立地する一番町の賑わいは取り戻せるか？ マイペースでわが道を行く紀伊國屋の今後は？ 老舗のブライドと現実の商売との間で苦悩する八文字屋はどうなる？ 「本を読まない」今時の学生を相手に東北大生協の打つ手は？ などなど、着目点は盛りだくさんであった。グループ訪問での定点観測は今後も必要となろう。

駅前や郊外で進行する大規模商業施設への大型書店の出店は、今後もしばらく続くだろうと言われている。しかし、規模や立地のみに目を奪われることなく、それぞれの書店の特質や人文書に対する取り組みなどを見据

えた現実的で細やかな対応が必要ではないかと考える。(書店名の表記は一部書略させていただいた)

金沢・富山方面

報告 小林文生 (慶應義塾大学出版会)

● 期日——六月三〇日(木)～七月一日(金)

● 参加メンバー——大和(大月書店)・華園(創元社)

佐藤(白水社)・小林(慶應義塾大学出版会)

● 訪問書店——金沢大学生協店角間・うつのみや本店・ブック宮丸金沢北店・金沢リプロ金沢店・富山大学生協五福店・清明堂・明文堂富山新庄経堂店・BOOK Sなかだ本店(計八店舗)

心の専門家が会おう法律

【第2版】 臨床実践のために

佐藤 進監修／津川 律子・元永拓郎編
実践現場で必要とされる関連領域ごとの法律知識を分かり易く解説。2520円



学校トラウマと子どもの心のケア

実践編 学校教員・養護教諭・スクールカウンセラーのために

藤森和美編著 事件や事故に対する心理的な緊急支援のやり方を、臨床心理士ら専門家が具体的に示した。2730円



インターネット・コミュニケーションと日常世界

池田謙一編著 ブログ・SNSなど最新のコミュニケーション手段を解説しながら人間と社会の未来を俯瞰。2940円



誠信書房

東京都文京区大塚3-20-6
TEL.03-3946-5666 《税込》

●感想…石川県庁が金沢駅を挟んで反対側に移転、喜久屋書店金沢店の撤退、めいてつブックセンターがリプロ金沢店に変わるなど、四〇〇〇五〇〇坪クラスのそれぞれのお店で、来店客数の推移やジャンル別の売行き動向をお聞きしましたが、それが一過性なのか、あるいは定着した傾向となるのか、不安を語る中にも時折、他店には負けないぞという意気込みを各書店担当者から感じる事ができました。

「薬の富山」の歴史を受継ぎ、どの店舗も看護・医療、そして福祉関係の棚割の充実さが印象に残ります。本年秋には、現富山大学・富山医科薬科大学、高岡短期大学の三大学が統合され、新富山大学として新設。大学生協と構内売店の今後には目が離せないことになるでしょう。また、創業一七七年の清明堂書店がある富山市総曲輪通り商店街は、平成一八年、大和百貨店の再開発が控えています。市中心商業地区として卓越した立地環境を有する当地区において、どのように書店勢力地図が変わるのでしょうか。

豊かさ指標上位両県にふさわしく、社会生活における「車」は特に、重要な移動手段になっています。郊外の

店舗では駐車場スペースや幹線道路からの出入り如何で、客足が大きく左右しているようです。

なお、今回の訪問では、各店で『人文会ホームページリニューアルのお知らせ』を配布させていただきながら、活用方法について説明を行ない、中でも、ジャンル検索については、書店担当者の皆様が興味を持たれ、棚の流れや分類方法に役立てて活きたいとご高評をいただきましたが、今後もご意見・改善点をご指摘いただくと共に、「お客様のための環境づくり」に、一方的な情報発信とならないよう、今回訪問が叶わなかった高岡市を含めて北陸地方の書店様とも、人文会として今後とも交流を深めていきたいと思えます。

名古屋方面

報告 橋元博樹（東京大学出版会）

●期日——六月二三日（木曜）——六月二四日（金曜）

●参加メンバー——鎌内（春秋社）・橋元（東京大学出版会）成田（法政大学出版局）・水谷（未來社）

●訪問書店 旭屋書店名古屋ラシック店・ウニタ・紀伊國屋書店ロフト名古屋店・三省堂書店名古屋高島屋

店・三省堂書店名古屋テルミナ店・ジュンク堂書店名古屋店・ちくさ正文館書店・名古屋大学生協南部書籍部・マナハウス・丸善名古屋栄店・リプロ名古屋店（計二店舗）

●感想…三月からスタートした「愛・地球博」の来客数がそろそろ一〇〇万に届こうとしているときに訪問したということもあってか、お会いする書店人さんから口々に出てくる言葉が「万博にお客様を奪われている」という悲観的な台詞でした。ガイドブックなどの万博関連商品の売上げもはや店全体の数字を押し上げる効果は全くなくなってきており、遠方からの来客が乗り換える名古屋駅周辺はまだしも、素通りしてしまう栄地区では飲食業なども含めて軒並み売上げダウンという状況がしばらく続いているということです。

しかし、このような厳しい環境のなかで各書店はそれぞれの創意と工夫によって売上げを伸ばそうと努力しています。新POSシステム導入で顧客サービスの強化を試みている丸善栄店、書籍だけではなく雑誌の単品管理までをも実現しているマナハウス、改装と棚割の見直しで常に顧客ニーズを取り入れている三省堂書店、人文書

好きの読者の嗜好を的確に掴んだ品揃えのちくさ正文館、二年目を迎えたジュンク堂書店は名古屋圏での認知度をじわじわと上げてきているようです。そして三月にオープンしたばかりの旭屋書店ラシック店は六二〇坪の店舗に豊富な専門書を揃えて読者にアピールしています。

このような独自性を追求しながらも一方では人文書担当の書店人達が店の垣根を越えたネットワークを作っています。これが名古屋ならではの非常に特徴的なことであり、今年の春には八書店合同企画として著者の講演会と各書店での「教養書」のブックフェアを開催しています。

競合しながらも協同して名古屋地区の読書人に働きかける、そういった志向性こそがなによりも私たち人文書版元にとっては心強いものである、と実感した二日間でした。

熊本・鹿児島方面

報告 藤代俊久（平凡社）

●期日——六月二三日（木曜）～六月二四日（金曜）

●参加メンバー——浴野（草思社）・江波戸（日本評論

社）平川（筑摩書房）・藤代（平凡社）

●訪問書店——ブックジャングル・ジュンク堂鹿児島店・紀伊國屋書店鹿児島店・鹿児島大学生協中央店・リプロ熊本店・紀伊國屋書店熊本店・蔦屋熊本三年坂店・金龍堂まるぶん・紀伊國屋書店熊本光の森店・（計九店舗）

●感想・新幹線開業に伴い鹿児島駅周辺の開発が進み、天文館と駅周辺に商圏が二極化。二〇〇四年九月オープンの紀伊國屋書店は通勤客、学生、主婦層など駅利用のお客さんをつかんでいる。一、二年先には郊外型の巨大複合SCが市内西部地区にオープン。また大型書店が一店舗増えそうです。人の流れが変わり、旧中心街の空洞化は都市景観、歴史を解体させ個性ある町が、疑似ユーロピアのような人工の町ばかりになりそうな心配です。今回の訪問で心洗われたのは、鹿児島大生協を訪ねるべく大学の正門に入ると、目の前で馬が芝生の草を食べていた光景です。ゆったりした時間が流れている実にいいひとときです。馬もいればペットの病院も大学構内にあるユニークさに訪問者一同感心しました。天文館

地区でお客様を掴んでいる。

ブックジャングルさん、ジュンク堂さんともに人文書の品揃えは限られた売り場のなかで工夫されています。二日目は開業して日の浅い九州新幹線で八代まで。新型車両は背もたれが木で作られているシックな座席で、JR九州の気合いがデザインや内装の斬新さに表れています。がトンネル多く風景は在来線の勝ち。

熊本は鹿児島同様、路面電車が活躍しており、無公害かつ低料金、市民の足としてはベストな乗り物です。熊本の中心、上通り、下通りまで路面電車でゆられ市内のリプロさん、紀伊國屋さん、まるぶんさん、蔦屋さんを訪問。特に強い印象を蔦屋三年坂店に受けました。営業時間は夜中の二五時、若い読者を掴んでいるようで、品揃えも若者向けの商品中心で、店内のレイアウトもモダンで青山ブックセンター、ブックファーストさんで本を買う感覚です。人文書はまだ弱く新刊フォロワーが今後の課題です。今年四月開店のゆめタウン光の森は土日には大渋滞になるほどの盛況。紀伊國屋さんも平日の午後でレジ前に列ができていました。郊外店の情報分析、研究は人文書の売上げに必修課題です。

人文会会員名簿

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町 3-24 白水社内

2005 年 12 月末現在

社 名	担当者	〒	住 所	電 話	FAX
大 月 書 店	駒谷 光彦	113-0033	文京区本郷 2-11-9	3813-4651	3813-4656
御茶の水書房	平石 修	113-0033	文京区本郷 5-30-20	5684-0751	5684-0753
紀伊國屋書店	段塚 省吾	150-8513	渋谷区東 3-13-11	5469-5918	5469-5958
慶徳義塾大学出版会	小林 丈生	108-8346	港区三田 2-19-30	3451-6926	3451-3124
勁 草 書 房	吉武 創	112-0005	文京区水道 2-1-1	3814-6861	3814-6854
春 秋 社	鎌内 宣行	101-0021	千代田区外神田 2-18-6	3255-9611	3253-1384
誠 信 書 房	新保 卓夫	112-0012	文京区大塚 3-20-6	3946-5666	3945-8880
創 元 社	華園 斉	162-0825	新宿区神楽坂 4-3 煉瓦塔ビル	3269-1051	5229-7139
草 思 社	浴野 英生	151-0051	渋谷区千駄ヶ谷 2-33-8	3470-6565	3470-2640
筑 摩 書 房	平川 恵一	111-8755	台東区蔵前 2-5-3	5687-2680	5687-2685
東京大学出版会	橋元 博樹	113-8654	文京区本郷 7-3-1	3811-8814	3812-6958
日 本 評 論 社	江波戸 茂	170-8474	豊島区南大塚 3-12-4	3987-8621	3987-8590
白 水 社	佐藤 英明	101-0052	千代田区神田小川町 3-24	3291-7811	3291-8448
平 凡 社	藤代 俊久	112-0001	文京区白山 2-29-4 (泉白山ビル)	3818-0874	3818-0674
法政大学出版局	成田 共助	102-0073	千代田区九段北 3-2-7	5214-5540	5214-5542
み す ず 書 房	持谷 寿夫	113-0033	文京区本郷 5-32-21	3814-0131	3818-6435
ミネルヴァ書房	杉田 啓三	607-8494	京都市山科区日ノ岡堤谷町 1	075-581-5191	075-581-8379
未 來 社	西谷 能英	112-0002	文京区小石川 3-7-2	3814-5521	3814-8600
吉 川 弘 文 館	馬場 正彦	113-0033	文京区本郷 7-2-8	3813-9151	3812-3544

(休会：青木書店・晶文社・有斐閣)

代表幹事 佐藤英明
 会計幹事 平石 修
 書記幹事 新保卓夫

(◎委員長 ○副委員長)

販売委員会 ・企画グループ ◎浴野英生・西谷能英・小林丈生・橋元博樹
 ・研修グループ ○段塚省吾・華園 斉・持谷寿夫
 ・図書館グループ ○杉田啓三・藤代俊久・駒谷光彦
 弘報委員会 ・弘報グループ ◎鎌内宣行・成田共助・吉武 創
 ・ホームページグループ ○平川恵一・江波戸茂・馬場正彦

[平凡社ライブラリー]

逝きし世の面影

渡辺京二 著

近代日本の文明のなんとこのびやかで夢のようであったことか……。昔日、日本を訪れた、異邦人によるあまたの訪日記を渉猟。日本近代が失ったものの意味を根底から問い直した超大作。 ●1995円(税込)

[平凡社新書]

サンカと三角寛

消えた漂泊民をめぐる謎

藤川全次 著

サンカとは何か。それは実像なのか、幻像なのか。この問いに正しく答えられるのは恐らく三角寛だけである。謎に満ちた漂泊民の真相を、三角の知られざる一面をまじえて描く。 ●819円(税込)

平凡社 〒112-0001 東京都文京区白山2-29-4
TEL 03-3818-0874 <http://www.heibonsha.co.jp/>

靖国問題の原点

宗教性と公共性を併せ持つ両生動物、靖国神社の問題を歴史・宗教・社会学から解き明かす!

三土修平 [著]

3刷

ISBN 4-535-58453-2 ◇1575円

女の子って、どうして
傷つけあうの?

娘をするために
親ができること

ロザリンド・ウィズマン [著] 小林紀子・難波美帆 [訳]
★香山リカさん推薦! ISBN 4-556-98439-X ◇1785円

◎日本評論社

東京都豊島区南大塚3-12-4 (価格は税込)
TEL 03-3987-8621 <http://www.nippyo.co.jp/>

法政大学出版局

<http://www.h-up.com/>

J. ハーバース 討議倫理

討議とは何か、討議倫理とは何か。了解と意志形成、正義と善はいかにして実現されるのか。カントとヘーゲルを問い直しつつ、道德・実践理性・正義・人格の原理を論ずる。清水・朝倉訳/3465円

H. バトナム

心・身体・世界

三つ摺りの網/自然な実在論/形而上学的実在論からの内的実在論を経て自然な実在論へ自らの哲学的立場を大変身させた注目書。独創性豊かな「新たなバトナム哲学」の展開。野本和幸監訳/4200円

T. ロックモア

ハイデガーとフランス哲学

フランス哲学のヒューマニスト的伝統のなかで、ハイデガーが主導的思想家となりえたのはなぜか。読めたい現象の核心に迫りつつ「思想のグローバル化」の問題を提起する。北川・仲正監訳/5040円

〒102-0073 東京都千代田区九段北 3-2-7
☎ 03 (5214) 5540 / 表示価格は税込です

肉声が明かす「超管理社会」の恐怖

監視国家

◎東ドイツ秘密警察に引き裂かれた絆◎

アナ・ファンダー「伊達洋」訳

■2520円

「人々の小さなブライドと小さな優越感と小さな嫉妬と小さな復讐と小さな裏切りが、壁をつくるのである。人々の心の中に『ベルリンの壁』をつくるのである。」
船橋洋一「解説」より ◎サミュエル・ジョンソン賞受賞

白水社

東京都千代田区神田小川町 3-24
tel. 3291-7811 / fax. 3291-8448
<http://www.hakusuisha.co.jp> *価格は税込

学問の未来

ヴェーバー学における末人跳梁批判

折原浩著

学問軽視・専門家無視の軽佻浮薄化する
風潮に抗し、痛烈に批判する論争書。

6090円

ヴェーバー学の未来

「倫理」論文の読解から
歴史・社会科学の方法会得へ

折原浩著

長いヴェーバー研究の精髓を渾身の力で
注ぎ込んだ「マックス・ヴェーバー入門」!

2520円

名を救う

否定神学をめぐる複数の声

ジャック・デリダ著／小林康夫・西山雄二訳

『パッション』『コーラ』とともに「名についての
三篇の試論」を構成する。臨場感あふれる
言説のパフォーマンス。1890円

未来社

※表示価格は税込

東京都文京区小石川3-7-2 〒112-0002
tel.03-3814-5521 www.miraisha.co.jp

『動物農場』ことば・政治・歌

川端康雄 禁圧された希望の歌に託されたメッセーじとは?
G・オーウェル 寓草小説の楽しき読解。(理想の教室) 三三三円

中原中也 悲しみからはじまる

佐々木幹郎 言葉はいかにして詩となるか? 「悲しみ」を
キーワードに、中也の詩の魅力に迫る。(理想の教室) 三三三円

リンさんの小さな子

クローデル 難民老人とやもめ男が交わす無言の友情と共
感。「灰色の魂」の作者が放つ最新話題作。高橋啓訳 八六円

グレン・グールド発言集

ロバート編 異才ピアニストの生活と意見。インタヴューと
テキスト四六編を註し解説を付し集成。宮澤淳一訳 七五五円

みすず書房 (税込)

東京文京本郷 5-32-21 http://www.msiz.co.jp

ミネルヴァ書房

源義経
新田義貞
武田信玄
上杉謙信

ミネルヴァ日本評伝選 武将と合戦

近藤好和

¥2310

山本隆志

¥2310

笹本正治

¥2310

矢田俊文

¥2310

日本近世人名辞典

竹内 誠・深井雅海編 豊臣秀吉から幕末維新まで、個性
溢れる有名人物三六五七人を網羅。詳細・正確な内容と、
多数の肖像などを収めた決定版。四六倍判/21000円

知っておきたい

2730円

好評3刷

日本の名言・格言事典

大隅和雄・神田千里・季武嘉也・山本博文・義江彰夫著
聖徳太子から松下幸之助まで、歴史上に輝かしい足跡を
残した一四四名の珠玉のことば。座右必備の書。A5判

吉川弘文館

価格
税込

東京都文京区本郷7-2 / 電話 03-3813-9151

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
TEL075-581-0296 価格税込み/宅配可

あったかもしれない日本

幻の都市建築史

橋爪紳也 昭和15年の万博、琵琶湖大運河…実現しなかった夢の計画にもう一つの国のかたちを読む。図版多数 ◆2310円

東と西の宇宙観

「西洋編」「東洋編」■二巻本

荒川紘 5000年の宇宙観の変遷に見る東西の思考様式の違い。「西洋編」…シュメールから現代宇宙論まで。「東洋編」…仏教から朱子学まで。◆各2940円

「モード性格」論

心理学のかしこい使い方

サトウタツヤ・渡邊芳之 「性格は変わらない」は嘘。時と場合によって自分をプロデュースするという新発想 ◆1890円

心は実験できるか

20世紀心理学実験物語

レスレイター／岩坂彰 世界を驚愕させ物議を醸した10の実験を追体験。何が心理学者を衝き動かしていたのか ◆2520円

紀伊國屋書店

出版部：東京都渋谷区東3-13-11
営業TEL03(5469)5918 表示価格は税込
<http://www.kinokuniya.co.jp>

人間の疎外と市民社会のヘゲモニー

生涯学習原理論の研究 黒沢惟昭著
人間疎外回復の主体形成のための原理論をさぐる意欲的な労作。3600円

市民社会論

その理論と歴史 吉田傑俊著 西欧市民社会論の歴史的展開と現代的な諸潮流を理論的に集約する。3570円

環境倫理と風土

日本の自然観の現代化の視座 亀山純生著 その基本的諸命題を問い直し共生型合意の規範を提起。2625円

「資本」の方法とヘーゲル論理学

角田修一著 マルクスがヘーゲルから継承した方法の合理的核心を『経済学批判要綱』に即して検討。3675円

大月書店 東京都文京区本郷2-11-9
電話03(3813)4651〈代表〉
<http://www.otsukishoten.co.jp/> (税込)

慶應義塾大学出版会

<http://www.keio-up.co.jp>

君主の統治について 謹んでキプロス王に捧げる
トマスアクイナス著 柴田平三郎訳 ●2625円

イスラームの人権 法における神と人
奥田敦著 ●2520円

イスタンブール 歴史と現代の光と影
長場紘著 ●2520円

子どもたちのメンタリティ危機
須永和宏著 ●2520円

〒108-8346 東京都港区三田2-19-30 【価格税込】
Tel 03-3451-3584 Fax 03-3451-3122

●読書という迷宮へのご招待12月刊行
上野千鶴子著 ―A5判・二〇〇頁・八四〇円税込

うえの・ちづこの本のラビリンス

うえの・ちづこのお奨め本リスト。社会学・女性学・歴史・ポストコロニアル理論などの古典・最新理論書から、詩歌・コミックス・写真集まで一挙公開。上野千鶴子主要著作データや書評・エッセイも紹介。

御茶の水書房

東京都文京区本郷5-30-20 電話03(5684)0751
<http://www.ochanomizushobo.co.jp/>